

全国学力・学習状況調査 稲築東義務教育学校(前期)

1 調査目的等

- ・義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- ・そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。
- ・学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。

2 学校における学力向上に向けての取組

1 学力向上に向けた授業改善

- ①主題研修と連携し、書く活動を通して、自ら考え表現できる児童を育成するために、授業スタンダードを全職員で確認し、授業力向上を図っていく。
- ②算数科における少人数指導(単純分割、習熟度別分割)及び入り込み授業を計画的に行う。診断的評価、形成的評価、総括的評価を行いながら特にCD層への支援を行っていく。

2 家庭学習の徹底

全教職の共通理解のもと、家庭学習の習慣化を図り、学力の定着を目指していく。また、家庭学習の個別化や家庭学習強化週間を設ける等の手立てを講じていく。

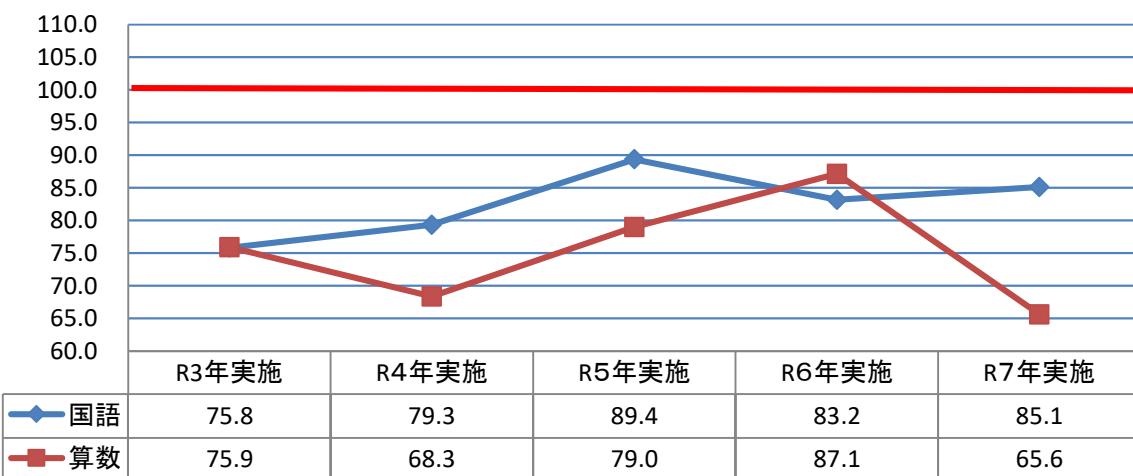
3「いなひがタイム」の充実

基礎基本の定着を図るために、昼休み終了後に「いなひがタイム」を位置づけ、100マス計算を中心に学校総体で取組を推進していく。

3 調査結果(全国の平均正答数を100としたときの標準化得点)

	国語	算 数
本校	85	66
嘉麻市	91.5	83.9
全国	100	100

推移



4 各学校における分析

全国平均に比べ国語科が10%、算数科では20%正答率が下回っている。

国語科、算数科ともに「知識・技能」及び「思考・判断・表現」に課題が認められる。

国語科では「思考・判断・表現」領域において、複数の情報を関係づけて考えたり、適切に表現したりする能力が不足していることが分かる。また、叙述をもとに要旨を把握する力に課題があることが明らかになった。また、R6県学力調査とR7全国調査の学力層の割合を示すと、上位からR6年度13.6、20.3、20.3、45.8からR7年度13.7、18.9、27.5、39.6となり、B層からA層へ、D層からC層へ向上が見られた。

算数科でも「知識・技能」に加え、「思考・判断・表現」領域に課題が見られる。中でも二つの数量関係に着目して必要な数量を見出したり、求め方を式や言葉に変換して記述する力に課題が見られる。また、表やグラフなどデータを活用して問題解決にあたる項目においても全国平均との格差が認められる。また、R6県学力調査とR7全国調査の学力層の割合を示すと、上位からR6年度16.7、18.3、35.0、30.0からR7年度13.8、8.6、24.1、53.3となり、上位層が下位層へ増加している。これは、授業実践において知識・理解を図ることにとらわれ過ぎ、論理的思考力を鍛える場面が不十分であったためと考える。加えて授業スタンダードの見直しと共通理解が急務である。

5 各学校における今後の取組

今後は、各教科の授業において、論理的思考力(筋道立てて考え、筋道立てて表現する力)をさらに鍛えることが大切だと考える。

このため、教師間で「論理的思考力」の内容について共通理解を深めるとともに、毎時間の授業において「問い合わせ」を工夫し、児童が「思考力」を発揮せざる得ない状況に誘うことが必要となる。また、その時間に活用させる思考力を明確にして授業を構築し、振り返り等の機会を通じ、児童生徒の思考力活用場面を意図的に取り上げ価値づけを行うことが大切である。加えて、毎時間の授業において、児童が自分の考えをノート等に書く機会を確保することで、筋道立てて表現する力を鍛えていくことが重要である。具体的には、授業研修会を継続的に実施し、論理的思考力に関する理論研究、それに基づく授業実践を通じた検証等を実施し「PDCAサイクル」が確実に機能するようシステム化を図っていく。

その他、算数科における分割授業の実施、「いなひがタイム」を活用した基礎基本の定着及び家庭学習の取組をさらに充実させていく。特に分割授業においてはCD層児童に対し、個に応じたきめ細かな指導を実施していく。

6 嘉麻市教育委員会としての今後の取組

○子どもが進んで問題解決を図る授業づくりを推進することで、主体的に取り組む態度とともに、思考力・判断力・表現力の育成を図る。

○小・中・義務教育学校とも、単元テストをもとに短いスパンで評価することを通して、一人一人の学習の定着状況を見るとともに、個に応じた授業づくりを推進し、C・D層の子どもの学力向上を図る。

○家庭学習の充実や帯学習の取組など、組織的な学力向上の取組を構築することを通して、基礎基本の定着を図る。